

4 過去の捕鯨操業をかえりみて

泉井守一（大洋漁業株式会社）

鯨資源の減少に伴ない、捕鯨関係者は鯨資源に対し、非常な関心を持ち始めて来たのと同時に、漁場把握の問題を大きくクローズアップしている。

私が大洋漁業の日新丸船団で、始めて南極洋へ出漁した昭和11/12年（1936/37）当時は、漁場の研究など全くその必要がなかつた。と言うのも、当時バック・アイス周辺迄南下すれば、シロナガスクジラの分布量多く、労することなく漁場を把握することが出来たからである。

当時の主な操業は、 $80^{\circ}\text{E}\sim 100^{\circ}\text{E}$ の海域におけるバック・アイス周辺にて、シロナガスクジラを対象として実施されたが、水色5程度の海域が特に好漁場を形成していた。

昭和12/13年度（1937/38）漁期も、前年度と殆んど同海域で操業が行なわれたが、昭和13/14年度（1938/39）漁期以降は漸次東へ移動した。その東方への漁場開拓には大西廉作船団長（現日本公海漁業社長）の実績に帰するところ大であつたことを特筆しておきたい。

才2次世界大戦後始めて出漁した昭和21/22（1946/47）漁期では、656~70ftのシロナガスクジラの増加が目立ち、更に、夫婦連れの群が非常に多くなつていた。経験的にみると、夫婦連れの多い漁場は非常に有望であるが、これらの現象をも考慮して総合的に判断すると、大戦中の5漁期間を休漁した結果、資源的には非常に安定した状態へ復したものと推察された。終戦直後は、 160°W を東の限界とし、主にロス海付近で操業を実施したが、この海域におけるシロナガスクジラは、3月の結氷期に至るまで一般に、SW~SSWの方向、即ちロス海に向かつて移動する傾向があつた。

昭和29/30年（1954/55）漁期（才9次南鯨）から、私が錦城丸船団（中尾健吉船団長：現東京商船社長）所属調査船でヒゲクジラ漁解禁前における約2週間にわたり漁場調査を行ない、ヒゲクジラ漁に備えての操業計画を立てるようになったが、その頃から鯨の移動および漁場について関心を深めるようになった。

昭和30/31年度（1955/56）漁期（才10次南鯨）には、次年度から実施が計画されていた南極観測の予備調査として、マッコウクジラ漁期間中（当時までは、ほぼ11月下旬から翌年1月6日まで）に、才16関丸で昭和基地への調査を実施した。その際、往航時における鯨の発見は皆無状態で、 62°S 、 30°E 付近のバック・アイス域から母船へ掃投するため北上そして東進したが、その途上E~SEに向かつて南下するナガスクジラを相当数発見した。その資料を基礎にして才11次南鯨（1956/57年度）では操業したが、非常な好成績を得ることが出来た。

更に、才14次南鯨（1959/60年度）までは、インド洋南の海域を、南鯨への往復航中にも調査を続けた結果、12月中~下旬に多数のナガスクジラ群がESE方向へ移動していることを確認し、その南方海域に漁場が形成されるのではないかと推定した。

その推定通り、好漁場を発見することが出来たが、その好漁場では水色、水温変化が大きく、更に潮目の多い海域と関係のあることが明らかとなり、漁場の判定基準には海洋学的要素が必要不可

欠な条件であると痛感した。

バック・アイス周辺に分布密度の高かつた鯨も、年毎に減少傾向を示し始め、より低緯度に漁場を求めざるを得なくなり、1960/61年度漁期(才15次南鯨)から低緯度漁場の開拓が実施された。その中でクローゼット島(CROZET I.)付近のナガスクジラは鯨体大きく、そして好漁場を呈していた。

1961/62年度漁期(才16次南鯨)には、日新丸船団長となり、その年には前年度漁期の操業海域から西へ移動し、 $50^{\circ} \sim 52^{\circ} S$ 、 $0^{\circ} \sim 30^{\circ} E$ の海域に長期滞留して好漁を続けた。この海域には好漁場多く、そして鯨体も大きく、最大体長83ftのナガスクジラを捕獲し、更に仔連れ群の多い点が特徴としてあげられる。同海域では、才17次南鯨においても操業し、好漁を得ることができたが、この漁期、 $0^{\circ} \sim 30^{\circ} E$ の海域におけるナガスクジラ資源量の減少を感じ取ることができたので、次期操業対策として $40^{\circ} \sim 43^{\circ} S$ を中心としたイワシクジラ漁場の調査を実施した。

その結果、 $80^{\circ} E$ 付近にイワシクジラの好漁場が存在していることを確認したが、更に、ケルグレン諸島南東海域においても、ソ連ウクライナ船団がイワシクジラおよびナガスクジラを対象として操業を続けていたが、種々な情報から相当数の鯨を、ヒゲクジラ漁期以外にも捕獲していたようである。

次に、最近開発されたニュージーランド諸島以東におけるイワシクジラ漁場であるが、この海域は、既に南太平洋タヒチ島周辺に存在するバンク域に関連づけ、千葉三郎砲手指揮のもとに調査を実施していた。

しかしその結果は、操業計画を立てるまでに至らなかつたが、今漁期(才22次南鯨)極洋捕鯨の飯田船団長が残された立派な成績に対し、実のところ敬服している次才である。

なお、ニュージーランドの南島周辺には、ナガスクジラに混合した小型のイワシクジラが多数分布していたが、同海域のイワシクジラに依存することは注意する必要があると思われる。

最後に、沿岸捕鯨について若干触れておこう。近年、特に三陸沖では漁場の遠隔化に伴ない、捕獲鯨の利用度が低下して来た。即ち、三陸沿岸捕鯨処理場でよく見られるように、456ftのイワシクジラで鮮度60%程度では、食用として用いている肉の利用度が非常に低下し、経営上好ましくない現象となつている。

一方、支那東海におけるニタリクジラでは(イワシクジラに比較して、体長は若干小さいが形状などイワシクジラに似ており、1954年までは同一種として取り扱われていたが、全く別種である)、体長39ftでも漁場、市場いずれも近距離にあるため、鮮度の条件良く、経営上も有利である。

斯様な状況であるから、三陸沖においても鮮度本位に操業を続けるならば、資源の保護とその完

全利用の一助ともなり、更に、経営上も好転するものと思われる。

この点、監督官庁の適切なる指導を切に懇願する次才である。

なお、近年急激に増加して来たイワシクジラの捕獲量について考察すると、その資源の将来は非常に憂慮せる状態にあるものと考えられる。従つて、今後のイワシクジラに対する捕獲については、慎重なる検討を加え、そしてその資源の高度利用を充分に考慮するとともに、コイワシクジラの利用開発を積極的に促進していただきたい。

(文責、奈須敬二、町田三郎)

5 総合討論

小副川：飯田さん、 45°S 、 160°W 付近で水温変化が顕著であつたとの報告でしたが、水温は一般に高温かそれとも低温か。

飯田：高温で、前に述べた通り潮目付近には鯨の分布密度が大であつた。

小副川：河村さんの講演で、漁場の A が 40°S 以北にまで及んでいるが、その図は注意しないと問題となる。公表する予定があるか。なお、A、B、C および D の漁場間で、胎児に関し何か変化がみられたか。

河村：今のところ公表の意志はないが、そのような時には勿論正確に書き直す。なお、胎児については特に検討していない。

泉井： 80°E のインド洋南に形成されているイワシクジラ漁場とマグロ漁場との間に、何か関係があるか。

奈須：マグロの種類はミナミマグロであり、その餌料について多くの資料を取り扱つた訳ではないから明らかなことは言えないが、現在私の知る範囲では、同一種の餌料の場合もあるので、同じ海域に両種の漁場が形成される可能性は充分考えられる。

なお、ミナミマグロの分布南限は、現在までの資料によると、概して表面水温 8°C 付近に存在していて、南極収束線と亜熱帯収束線との中間に当たり、マッコウクジラ雌の分布南限と全く一致している。その原因は良く分らないが、海洋の生物環境か物理環境又はそれらの複合されたいずれかであろう。

小副川： 80°E 付近の漁場が、高緯度の融氷に起因した冷水のもつとも北上する海域ではなからうか。

飯田：小副川さんが言われたように、私も同様な傾向があるものと考えており、更に、ケルゲレン諸島周辺は複雑な海況を呈することが多い。

奈須：それは、恐らくケルゲレン諸島から南東に伸びる、ケルゲレンーガウスベルグ海嶺に起因しているものと思う。

奈須：インド洋域では、暖水塊南下の顕著な海域がみられたという報告があつたが、暖水南下の消長と気象との間に、何か関係があるのではないかと考えられるが、今漁期における気象の特徴を